

# 茨城大学学報

第343号

平成31年2月～平成31年3月



たくさんの学びと思い出を胸にはばたく

## INDEX

- ◆ 高大接続ワークショップ「教員を目指す君たちへ」を開催
- ◆ 茨城地域留学生交流推進協議会が茨城県国際化推進奨励賞を受賞
- ◆ 「茨城大学社会人リカレント教育フォーラム」を開催
- ◆ 「茨城遊学プロジェクト-花の陣-」開催
- ◆ 平成 30 年度学生表彰 0 人・11 団体に表彰
- ◆ オウム事件の報道関係者 110 人のインタビュー結果を学生たちが報告
- ◆ 平成 30 年度卒業式

茨城大学広報室

TEL 029-228-8008

FAX 029-228-8019

## ◆ 高大接続ワークショップ「教員を目指す君たちへ」を開催

全学教職センターが、2月2日（土）、教員を志望する茨城県内の高校生を対象に、教職に対する理解増進と意欲向上を目的とした高大接続ワークショップ「教員を目指す君たちへ」を開催し、4校から82名が参加しました。

ワークショップでは、茨城県教育庁学校教育部高校教育課長の石井純一氏と同課長補佐（指導担当）の長島利行氏を来賓に迎え、両氏から参加者へ「今日参加したみなさんにはぜひ将来、教員になってもらいたい」と激励が送られました。8つの班に分けられた高校生たちには、「これからの小・中・高等学校には、どんな先生がいてほしいか」を話し合っただけで発表するという課題が与えられました。

参加者は初対面ということもあり最初は自己紹介もたどたどしかったものの、次第に活発な議論を始め、意欲的に課題に取り組む様子が見られました。各班は動画編集ソフトiMovieで発表資料を作成し、プレゼンテーションに臨みました。それぞれの班には茨城大学の学生がサポートとして加わっていましたが、高校生たちの完成度の高い発表に、学生たちも目を見張っていました。

5時間を超える今回のワークショップで、参加者は、茨城大学の授業でも取り入れられているアクティブ・ラーニング（問題解決のために皆で考え、解答を出す学習）を体験し、満足した様子でした。教職に興味がある、あるいは将来教員を目指そうと考えている高校生たちにとって、今回の事業は彼らの意欲をさらに高揚させるものとなりました。

本学では、高校生や高校教員向けのワークショップを継続的に開催し、大学と高校が一体となって地域の教員養成に取り組むこととしています。



小川哲也全学教職センター長による挨拶



グループワークの様子

## ◆ 茨城地域留学生交流推進協議会が茨城県国際化推進奨励賞を受賞

本学の三村信男学長が議長を務める茨城地域留学生交流推進協議会が、「平成 30 年度茨城県国際化推進奨励賞（国際化促進部門）」を受賞しました。2 月 8 日に茨城県庁で表彰式が行われ、三村学長の代理で太田寛行理事が出席しました。

この賞は、茨城県の国際化推進に貢献した団体や個人を対象に県が表彰するものです。

1989 年に茨城大学長を議長として設置された茨城地域留学生交流推進協議会は、県内 11 の高等教育機関、8 の地方公共団体、7 の経済団体、4 の国際交流関係団体から構成されており、各団体が協力しながら様々な国際交流活動に取り組んできました。奨学金や就職支援などにより県内で学ぶ留学生の学生生活の充実に寄与したほか、留学生が地域の学校や生涯学習の場に出向いて自国の文化を紹介する「ワールドキャラバン」などの事業を通して地域住民との交流活動を継続的に行っていることが評価され、このたびの受賞に至りました。



受賞の喜びを語る太田理事



他の受賞者との記念写真

## ◆ 「茨城大学社会人リカレント教育フォーラム」を開催

2019年度から「茨城大学リカレント教育プログラム」が新スタートするのを前に、2月22日（金）、水戸市内で「茨城大学社会人リカレント教育フォーラム」を開催しました。

本学ではこれまでも公開講座や公開授業、社会人に特化した大学院コースの設置といった形で、社会人による学習の機会を提供してきましたが、今回、社会のニーズに合ったプログラムの体系化や受講証明の発行、企業等の相談に応じたプログラム提供などの仕組みを新たに整備しました。

また、自治体や企業などのニーズをよりきめ細やかに把握し、最適なプログラムの策定や改善につなげるため、本学と自治体・企業などで構成する「いばらき社会人リカレント教育懇談会」を発足しました。発足メンバーには、関彰商事株式会社などの県内企業や、茨城県、茨城県教育庁、本学キャンパスを有する水戸市、日立市、阿見町の各自治体が名を連ね、今後定期的な協議を行うこととしています。

この懇談会の発足を兼ねた「茨城大学社会人リカレント教育フォーラム」では、文部科学省総合教育政策局生涯学習課の久保田達也課長が基調講演を務め、リカレント教育についての国の動向などを紹介したほか、関彰商事株式会社取締役常務執行役員の岡本俊一氏が同社における人材育成の取り組みと本学への期待について発表しました。

茨城大学リカレント教育プログラムについての詳しい情報は、今後、ホームページなどで順次公開していく予定です。



懇談会の発足メンバーとなる団体の代表者



基調講演をする文部科学省の久保田氏

## ◆ 「茨城遊学プロジェクト-花の陣-」開催

3月2日（土）、「茨城遊学プロジェクト-花の陣-」と題した講演会・ワークショップのイベントを水戸市内で開催し、茨城県内外から約170人が来場しました。

このイベントを企画した「茨城遊学プロジェクト」。このプロジェクトは、本学の職員や学生を中心に、地域・大学・ポップカルチャーを連動させた地域の魅力発信に取り組んでいます。今回は第123回水戸の梅まつりの開催期間に合わせて、近年若い女性などから人気を博している「刀」をテーマにした講演会、地域企業によるミニサイズの提灯や畳の制作ワークショップ、学生によるポスター展示などを実施しました。

講演会は、刀剣を学術的観点から読み解く第一部と水戸の刀剣ブームに迫る第二部の二部構成。本学人文社会科学部の高橋修教授をはじめ、茨城県立歴史館、公益財団法人徳川ミュージアム、水戸市観光課から講師を招きました。

第一部講演で高橋教授は、水戸藩出身の史学者・菅政友が発見した七支刀の銘文や、菅政友の蔵書（通称：菅文庫）が茨城大学に寄贈されるまでの経緯などを語りました。県立歴史館の学芸員からは、同館が所蔵する一橋徳川家の刀剣類の解説や日本刀の意義についての考察がなされました。

第二部では、徳川ミュージアム研究員及び水戸市観光課職員が、水戸における刀剣ブームの火付け役となった刀「燭台切光忠」の逸話や地域観光へ発展した経緯を紹介。学生と講師によるパネルトークも行われ、ブームの裏話なども披露されました。

当日は本学学生も運営スタッフとして参加し、来場者からも「地域や学生の活動が知れて良かった」と好評を博しました。



高橋教授の講演



学生によるパネルトークの様子



ミニ畳ワークショップに取り組む来場者

## ◆ 平成30年度学生表彰 70人・11団体に表彰

平成30年度学生表彰の表彰式が、3月13日（金）、に行われました。

学生表彰は、学業、文化・芸術・スポーツ、ボランティアや人命救助等といったさまざまな分野で活躍した学生を対象として、学長が毎年表彰している制度です。今年は70人・11団体の学生が表彰されました。

このうち、教育学部4年生（2018年度）の堀佳月さんは、「トビタテ！留学 JAPAN 日本代表プログラム・第一回留学体験発表会」において、優良賞を受賞したことが評価されました。また、理工学研究科の多くの大学院生が、学会等で優秀発表賞などを受賞した功績で表彰されました。

文化・芸術・スポーツの分野では、砲丸投げ・円盤投げで大会優勝などの活躍を遂げ、国体出場果たした教育学部の神山結衣さんなどが表彰されました。



## ◆ オウム事件の報道関係者 110 人のインタビュー結果を学生たちが報告

人文社会科学部の村上信夫ゼミ（メディア論）は、3月20日（金）、東京都の江東区古石場文化センターで「オウム真理教事件とメディア—宗教報道はどうあるべきか—」と題した研究報告会・トークイベントを開催し、約60人が来場しました。

同ゼミではメディアやジャーナリズムに関わる研究を行っており、2018年度は3年次の6人の学生がオウム真理教による一連の事件の報道に関わった記者・ジャーナリストのオーラルヒストリー研究に取り組み、昨年5月から110人にインタビューを実施しました。

学生たちはいずれも地下鉄サリン事件よりも後に生まれた世代で、インタビューにあたってはまず事件前後における新聞・テレビ・雑誌の関連の報道の推移を調べました。インタビューでは、「オウム真理教を当時どう伝えたか」「信教の自由と報道の関係」「報道はオウムの暴走を止めることができたか」など質問。その結果、ほとんどの記者が1990年までにはオウム真理教の存在を知っていたものの、4割が「まさか宗教法人がテロを起こすとは」と語っていたということです。また「報道はオウムの暴走を止められたかと思うか」という質問には、26%の記者が「止められたと思う」と答える一方で、十分に追及できなかった背景として「警察の捜査が及んでいなかった」「記事の訂正を求めたり訴訟をちらつかせるなどの法人の反応がバリアになっていたかも知れない」などと振り返っていました。

調査結果を踏まえ同ゼミでは、「報道は抑止力になった。予兆、危険性を感じたら小さな予兆でも追及してほしい」と要求するとともに、報道の受け手である自分たちも「カルトと宗教の違いを学び、記事やニュースに対して敏感になり、建設的な発信をすること。また、自分の周囲の兆候を発信すること」が必要であると提言しました。

後半は、オウム真理教の報道に第一線で取り組んできたジャーナリストの江川紹子氏や映画監督の森達也氏などを招いたパネルディスカッションを行いました。江川氏は、『宗教報道』の問題として括ってしまうと宗教でない危険な団体が見えなくなる」、「報道だけに特化してしまっているが、当時のバラエティ番組や討論番組なども調査の対象にすべき」などと指摘しつつも、学生の提言については、「報道を受ける側もそれが事実なのかを受け止める習慣や、良い番組や記事を見たら『良かった』ということが大事」と賛同していました。

同ゼミでは引き続きインタビューの結果を分析し、今後はテキストとして発信することなども検討しています。



パネルディスカッション

## ◆ 平成 30 年度卒業式

3月26日（火）、茨城県武道館において、学長、役員はじめ来賓等の参列のもと、平成31年度茨城大学卒業式が挙行され、2,081名の卒業生が巣立ちました。

管弦楽団の前演奏で幕を開けた卒業式では、アカデミックガウンを纏った三村信男学長から学部、大学院および専攻科の卒業生、修了生の学部等総代に学位記、修了証書が手渡されたのち、告辞が贈られました。

これに対し、卒業生総代の教育学部石川穂波さんから答辞があり、最後は参列者全員による校歌斉唱で閉式となりました。



## ◆ 平成 30 年度卒業式学長告辞

茨城大学長 三村 信 男

卒業生、修了生の皆さん、卒業、修了おめでとうございます。学業を成し遂げ、この日を迎えられたことを、心からお祝いいたします。

ただ今、2,081名の皆さんに、学位記と修了証を授与いたしました。この中には、74名の留学生も含まれています。これだけ多くの皆さんを社会に送り出すことができるのは、茨城大学にとって大きな喜びであり、また、誇りとするところであります。

今日に至るまでには、それぞれ勉学や研究において大きな努力をされてきたと思います。この学位記と修了証の授与はその成果に対するものであり、皆さんにとって、存分に達成感に浸り、自らを誇らしく感じるに値するものであります。

同時に、この日に至るまでに、皆さんが沢山の方々に支えられてきたことも忘れることはできません。指導教員をはじめ、多くの教職員や友人・先輩が皆さんの勉学を支援してきました。また、ご家族の皆様も、陰になり日向になり皆さんを支えてこられました。ご家族と関係者の皆様のお喜びもさぞかしと、心からお祝いを申し上げます。





さて、皆さんは茨城大学での学園生活をどのように振り返っているでしょうか。

私は、最近、本学の学生の活動が注目されることが大変多くなったと感じています。それは、皆さんが、地域や海外に出かけて活動を繰り広げる、あるいは、優れた学会発表によって学会賞を授与されるなど、様々なところで

活躍してきたためです。こうした活躍は、決して偶然ではなく、現在進めている教育改革に結びついています。皆さんが在学した過去数年間、本学では、教育改革を進めてきました。

まず、学部卒業生の皆さんが入学した平成 27 年に、ディプロマ・ポリシーを策定しました。ディプロマ・ポリシーとは、卒業までの教育目標のことであり、茨城大学で身につけるべき 5 つの能力を定めたものです。このディプロマ・ポリシーの発表は、「変化の激しい時代を生きる総合的な人間力を育成する」という本学の宣言でした。私は、皆さんが、卒業までの 4 年間、あるいは、大学院での 2 年間に、多面的な能力を身につけたものと確信しています。皆さんには、この事に自信をもって、社会にこぎ出して欲しいと思います。

次に、皆さんの未来に向けて、期待を述べたいと思います。それは、「社会の変化に対応できる人間として成長してほしい」ということです。21 世紀という時代の特徴は、社会の変化の速さ、大きさにあります。この変化に柔軟に対応する力こそ、未来を生きる人間に必要とされているものだと考えています。

現在の世界は、科学技術の進展のスピードが早く、第 4 次産業革命といわれるような産業のデジタル化、大転換も進んでいます。人工知能や自動運転のように、実現にはまだ 10 年も 20 年もかかると言われていたことが、すでに生活の中に入ってきています。こうしたデジタル技術革新によって、世界の姿は大きく変化していくでしょう。私達は、今、極めて大きな時代の転換点に立っているのです。





しかし、このように自動化され、ロボットが進む社会では、逆に、一層人間らしい一人一人の個性が重要になります。技術の進歩を多くの人々の幸福や持続的で健全な社会の構築に活かすには、技術では替えることのできない人間の価値観や判断力、人と人のふれあいが不可欠です。まさに、人間の深い思考や判断力、みずみずしい感性が問われることになり

ます。

このように変化が激しく、先の見通せない時代を生き抜く上で、2つのことが大切だと考えています。

その第一は、一人一人が、「自分の軸」を持つことです。広い意味での専門性、あるいは個性と言えるものです。周りが変化するからこそ自分のよって立つものをしっかり持っていることは非常に重要です。広い知識やスキルに裏付けられた自分自身のものの見方や考え方ですが、皆さんが本学で学んだことは、この自分の軸を作っていくことだったのです。

もう一つは、広い視野を持つことです。これは、変化する社会の動きを把握して、自らがその中のどこに立っているのかを見通す力です。激しい変化の中で自らを見失わないためには、広い視野が必要です。また、どんな仕事であれ、自分の専門だけで解決できる問題はありません。直面する問題の全体像を捉え、同僚や他の分野の人と協力して初めて解決できるものであり、そのためには、自らの専門の枠を超えて他の分野を理解し、協力することが必要です。

この2つを備えた人は、T型人間と呼ばれます。アルファベットのTですが、横棒は広い視野を表し、縦棒は自分の軸となる専門性や個性を示します。これからの人生の中で、横棒を大きく広げ、縦棒を太く深くして、スケールの大きなT型人間になって欲しいと思います。そして、皆さんが、どのような場所で働き、生活するとしても、自らの指針を持ちつつ、その時々の変化に柔軟に対応できるリーダーとして成長し、よりよい社会の実現に向けて活躍されることを願っています。

最後に、茨城大学は今年、創立70周年を迎えます。5月25日には「創立70周年記念式典・祝賀会」を催し、卒業生・



修了生の皆さんと共に盛大に祝いたいと思います。また、これを契機に、さらに創立100周年に向かって、より一層、持続的な社会の実現に向けて貢献できる大学へと成長していきたいと考えています。私達は、今後さらに努力をつづけて、卒業生の誇りとなる大学になるべく前進していきます。茨城大学は、皆さんの母校です。その名の通り、皆さんが、うれしい時、悩んでいる時、どんな時でも訪ねて頂けるように、常に門戸を開いて待っています。

皆さんの今後の人生でのご活躍とご多幸を心から祈念して、私の告辞といたします。

